大阪公立大学
Osaka Metropolitan University
学術情報リポジトリ

教育方法としてのディベート

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2013-12-10 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 湯城, 吉信 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00007753

教育方法としてのディベート

湯城吉信*

Debate as a Education Method

Yoshinobu YUKI*

要　旨

今年度、実践した結果、ディベートは国語力を高め、方法論を身につけるための方法として有効であると確信した。実施の際、私が注意したのは、論題の設定と評価の基準である。論題は政策論題を勧め、評価の基準はチーム全体の説得力を重視した。ディベートの問題点として銘記すべきは、その二値的設定である。ディベートの目的は、論題について理解を深めることにあり、二値的設定は、その目的のための一つの手段であり一つの試みであるに過ぎないと認識することが必要である。

Key Word : Debate, Japanese, Education Method

はじめに

１９９６年度、４年国語（必修１時間）ではディベートを行った。ディベートとは、ある議題をめぐって肯定側と否定側に分かれ討論する知的ゲームのことである。本稿では、ディベート導入の理由と、注意した点について述べたい。なお、実践記録は『府立高専教育』３号に発表したので合わせてご覧になられたい。

ディベートを実践しようとする場合、まず次のようなことが懸念される。ひとつは、議論を好まず、またやったことのない学生に果たして本当にできるのかということ、もうひとつは、自分の考えと関わりなく肯定側、否定側に分かれ、相手を負かすことを考えるディベートは形式的に問題があるのではないかということである。本稿ではその疑問にも答えたい。

今回のディベートは私にとっても初めての試みであり、うまくいくかどうか不安はあったが、１年間やった結果、国語力を高めるための方法として有効であるという確信を持った。

１９９７年４月１０日受理
*一般教養科（Department of Liberal Arts）

Ⅰ、ディベート導入の理由

１、私の基本認識

まず、（１）国語についての私の考えと、（２）私が学生に教えたいことの２点について述べたい。今回のディベート導入の理由の根底にこれらがあるからである。

（１）国語力について

国語力とは、日本語を読み、書き、聞き、話す４つの能力のことである。そして、国語はこの４つの能力を高めることを目標とする。

＊これは私の理解である。学習指導要領では、「心情を豊かに」するということが、目標の一つに掲げられている。そのため、従来文学に重きを置いた国語教育がされてきた。

だが、従来の国語教育では、話し、聞く面は軽視されてきた。このうち、話す面については、文部省が「自己学習能力」なるものを提唱し、強調されるようになってきた。一方、聞く面については、有効な学習方法がないためか、重視されていない。だが、私は、

この聞く力を高めてはじめて総合的な国語力向上が図れると考える。

このように、国語力、国語の目標ともに明確に定めることができる。だが、問題はどのような方法によってそれを達成するかである。

（2）私が学生に教えたいこと―方法論（智恵）の体得

以下、私の個人的体験を述べさせていただく。私は、大学で中国哲学史を専攻した。そこでいちばん苦労したのは、研究の方法がわからなかったことである。授業は文献の読解が中心で研究方法については教えられない。それは、研究の方法は教えられるものでもないし、また自分で見つけなければならない（それができた者が研究者になる資格を有する）という暗黙の了解からだと理解している。そこで、当然、自分で模索することになる。私は論文の書き方の類の本にもいろいろ目を通した。その中で、印象深かったのは、川喜田二郎『発想法』（中公新書）、梅棹忠夫『知的生産の技術』（岩波新書）などである。

これらの本に引かれたのは、それまで語られることのなかった学問の方法が「型」（パターン）として紹介されていることである。そして、専門が違う人が書いた本でありながら、それが自分の参考になることである。つまり、普遍性がある。これらの本を読んで私は、知識ではなく智恵が授けられた気がした。

そして、私が専門の学問を通じて自分のためになったと思うのも、知識が増えたことではなく、どのように対象を見つけアプローチ・処理するかという智恵である。他のことをやっても同じようにやっていけばよいという自信のようなものである。

＊林望『知性の磨きかた』（ＰＨＰ新書）でも、知性とは、学問の方法を身につけることだと言う。その学問の方法は、一つのことに邁進することによって身につくが、それを身につければ何にでも応用できるという普遍性を持つ。

私は、学生にも、以上のような学問的方法を身につけてほしいと考えている。また、一般科目の目標もそのようなところにあると考えている。

＊私は、普遍的な学問的方法を教えるために、一般科目の教官も研究する権利と義務があると考えている。また、実際、学校がマスター卒業以上の教官を求めている以上、学問研究の面が尊重されて当然であろう。

だが、ここでも問題になるのは、その方法論をどのようにして教えるかということである。方法論だけ講義しても、抽象的で身につかない。方法論は実際の作業の中においてはじめて意味を持つからである。つまり、必然性を持ち学生が興味を引く作業が必要になる。

2、方法としてのディベート

以下、国語力を高め、また方法論を身につけさせる手段としてディベートが有効なことを述べたい。

（1）国語教育としてのディベート

先に書いたように、国語の授業の目標が明らかになったところで、問題となるのはそれをどのようにして学生に身につけさせるかである。要約は文章読解力を高めるいい練習になる。だが、学生にとって、興味のない文章を読み、目的もなく要約を書くというのは苦痛でしかない。そして、教科書を使っている限り、大多数の学生にとって苦痛でしかない授業を繰り返さざるをえない。

国語の授業には必然性（必要性）がなかったのだ。教科書にあるからという以外、その文章を読む必然性も、読解の練習になるからという以外に、要約を書く必然性もない。そこで、私は過去２年間発表学習を行った。そこでは、調べ、読み、書く必然性が出てくるからである。学生は約１０分話すために、調べ、読み、原稿を書く必要がある。ただ、発表しても、発表者は聴衆にわからせる必要もないし、聴衆もわかる必要がない。聴衆に質問させたり、要約してメモさせたり、テストしたり、とその予防策を施すことはできるが、それは私が上述する必然性にはあてはまらない。発表学習の一番の問題点は、聞く練習にならないということである。

ディベートは、４つの国語力のいずれも要求される。しかも必然性をもってである。これが、私が国語教育の方法として、ディベートが有効だと考える理由である。以下、読む、書く、聞く、話すの順序で具体的に説明していく。

まず、「読む」についてである。これは、基本的に発表と同じである。ある論題でディベートするには、その論題について知識を得なければならない。そこで多くの資料に当たり「効率的に自分の必要な部分を見つける」（立花隆『ぼくはこんな本を読んできた』文芸春秋社、１４１頁）読書が要求される。精読、速読

という分類で言えば、速読である。教科書による授業では、精読（鑑賞）が中心になるが、実際の生活や仕事で要求されるのは主に速読である。ディベートは肯定側と否定側とに分かれるので、「効率的に自分の必要な部分を見つける」練習にぴったりである。ただ準備が進み、立論を考える段階や実際の討論会では、資料をどう解釈するかという精読も要求される。

ここで、次のような懸念をさせる方があるかもしれない。以上のような読書法は同時に、自分の必要でない部分は切り捨てる（見て見ぬふりをする）ことになるのではないか、と。確かに、ディベートでは自分たちの立場に不利なことは言わない。だが、それは相手が言う。その相手に反論できなければ負けである。つまり、相手の立場も研究し、それを想定して自分たちの立論をする必要がある。自分に都合の悪い部分を切り捨て無視することはできない。肯定、否定に分かれることは、思考を整理する上でむしろプラスになる。

さて、次に「書く」である。ディベート討論会では、冒頭で各チームが自分たちの立場、その根拠を演説する。それを立論と呼んでいるが、その内容は各チームあらかじめ準備しておく。つまり、小論文を書いておかなければならない。この立論を立てることが小論文のいい練習になる。（『府立高専教育』３号「４年国語ディベート教育の報告」に詳しく書いたので参照されたい。）漠然と自分の意見を述べるのは難しいが、ディベートの場合はパターンがあるからまとめやすい。先に書いた肯定、否定両面に分けるだけでも、何も設定がないよりはずっと書きやすくなる。

「話す」と「聞く」とはディベート討論会に必要とされる。

「話す」については、ディベートでは相手を言い負かし、聴衆を説得（ディベートの判定は聴衆がする）しなければならない。相手にわかるように話す必要性があるのである。

次に「聞く」である。討論会に参加している者は、相手の言ったことに反論しなければならない。そのために、相手の発言を正確に聞き取ることが要求される。また、聴衆もディベートの優劣を判定しなければならない（審判団を独立させる場合と、聴衆全員に判定させる場合がある）ので、真剣に聞かざるを得ない。なお、授業では、途中からフローシート（議論の流れの記録）を導入して、記録を課した。これは、素早くノートを取る練習になる。

＊林望『知性の磨きかた』（１５５頁）では、「速く書く、それがノートの正しい取り方」であると言う。

以上のように、ディベートは、必然性を持ちながら、国語力を総合的に高める有効な手段になる。（ディベートがどのような能力の向上に役立つかは『英語ディベート実践マニュアル』に詳しい。）

（２）方法論を身につける手段としてのディベート

以下、ディベートが方法論の体得に役立つということを述べたい。

先に述べたように、私が学生に身につけて欲しいと考えるのは、知識ではなく、知識を得、それを整理し、また発表できる方法論（知恵）である。方法論を教えるにはパターンがないと難しい。ディベートでは、立論→反論→最終弁論というフォーマット（進行次第）が決まっており、立論の立て方にもパターンがある。パターンがあれば学生もやりやすい。私が授業に取り入れようと思ったのは、まさにこのパターンに引かれたからである。

ここで、簡単に私とディベートとの関わりについて述べておきたい。私は、専門の関係上、文献をめぐって討論するという経験は持っているが、いわゆるディベートの経験はない。以前、ＮＨＫ教育テレビで、ＰＫＯ参加の是非をテーマにディベートしているのを見ておもしろいという感想を持った程度である。それが、２年ほど前に北岡俊明の『ディベート能力』を読んで、授業でやってみたいと思うようになった。それは、上に書いた国語力向上という目的のためというより、むしろ、パターンがあり方法論を身につける練習になると思ったからである。ディベートのパターンは、前に挙げた方法論の書と共通する普遍性を獲得していると考える。思考の助けになるということだ。

学生をパターンに押し込めることはよくないと反論されるかもしれない。だが、反面教師にせよ、教師はパターンを教えることしかできない。学生は、納得するにせよ、反発するにせよ、このパターンを基にして自分にあった思考のパターンを探し出してくれればよいと考える。また、４０人以上のクラスで、他にやり方があるのだろうか。

最近、東京大学の『知の技法』に習ってか、基礎演習なる授業を設けて、新入生に学問の方法を身につけさせようとする大学が出てきているようである。私が授業でやろうとしたのも基礎演習としてのディベートである。ディベートのためのディベートではないことを強調しておきたい。

II、ディベート導入に際して注意した点

本章では、授業を始めるに当たっての私の研究と、それに基づいて、実施の際特に注意した点について述べたい。

授業を始めるに当たって、私は、北岡氏の『ディベート能力の時代』を読んだ程度の素人であったので、まずディベートの教育方法と実践について研究した。ディベート教育については『教室ディベート入門』と『日本語学　特集　ディベート』１９９５年６月号を読んで、授業の輪郭を考えた。

なお、学生に見せることも考えて、実際のディベートが録画されたビデオを探しているが、今もって藤田直幸先生から貸していただいたビデオだけである。管見が及ぶ限り、今年度テレビで実戦が放映されることもなかった。もし、どなたかビデオをお持ちでしたらお教えいただきたい。

また、私自身実戦経験がなかったので、毎日新聞社主催の「ディベート入門」という教室に通った。（５月から７月まで、１回２時間、計６回）これは、実戦が経験でき、入門の教え方がわかったので、非常に参考になった。その他、学生に教えてもらって産経新聞主催の「ザ・ディベート・アカデミー」という大学生のディベート大会を見に行った。（今年で４回目で毎年開かれているらしい。）これは、ディベートの実戦が見られて参考にはなったが、内容的には非常にくだらなく、これだけ見るとディベートに拒否反応を示す人の方が多いのではないかと思われた。それは、口の達者な者たちの屁理屈のこねあいになっていたからである。それは、フジテレビのディベート番組（上述のビデオ）や私が参加したディベート教室でも見られた傾向である。日本でディベートは英語弁論部から始まったそうで、ディベート大会に参加する者は、弁が立つ者に限られていたからかもしれない。そういうディベートは私自身好きでないし、まず教室で全員に参加させることはできないであろう。

１９９０年５月２２日付け朝日新聞（「ディベートの時代」）、１９９６年８月２８日ＮＨＫ総合クローズアップ現代（「交渉に勝てる話術を磨け－高校生ディベート選手権」）もディベートを取り上げている。「クローズアップ現代」では、題に見えるように、交渉能力を高めることにポイントが置かれている。（国が肩入れしだしたのは、外交交渉で痛い目を見たことが原因らしい。）「話す」ということに重点が偏っているのである。

私は外国との交渉能力を高めることも大事だと思うが、ディベートの第一目的はあくまでテーマについて理解を深めることだと考える。そのために注意したことは、（１）テーマと（２）評価の基準である。

（１）テーマ

ディベートのテーマは大きく「政策論題」「価値判断に関する論題」「事実に関する論題」の３つに分けられる。（他の分け方もあるが大同小異。）政策論題ディベートとは、「～するべきだ」というテーマについて肯定否定に分かれるディベートである。価値判断に関するディベートとは、「ＡかＢか」というテーマをめぐり、Ａ側とＢ側とに分かれるディベートである。事実に関するディベートとは「邪馬台国は九州に存在したか」など、事実に関するディベートである。

私は、学生には基本的に政策論題を選ばせた。それは、価値判断と事実に関するディベートは問題が多いと考えたからである。

まず、価値判断に関する論題は得てして好みの問題に帰しがちである。例を挙げる。「ザ・ディベート・アカデミー」のテーマは、すべて価値判断に関するものであった。「見合い結婚がよいか、恋愛結婚がよいか」などである。この論題は、見合い結婚、恋愛結婚の定義（線引き）がはっきりしないという基本的問題があったことに加え、次のような問題があると感じた。それは、見合いか恋愛かは、全く個人的な問題であるが、また、全く個人の自由意志に委ねられているわけでもない。結局は個々人の状況によってある程度やむを得ず選ばなければならないものである。そのようなテーマについて肯定否定に分かれるのは無理がある。ディベートの目的を「テーマについて理解を深める」ことに置くのなら、このようなディベートが、結婚について理解を深める契機になればよいではないかという意見もあるかもしれない。だが、私は、論題についても必然性が欲しいと思っている。どちらかを選ばざるをえない、そして、どちらも意志決定さえすれば選べるという状況設定である。（外的力を考慮しなくてよいということ。）そこで、現実的なテーマがよいと考える。先の論題には、若者の興味を引こうという配慮が見られるが、それも無用だ。

ディベート教育関係の本で紹介されているのは、価値判断に関するテーマが多い。その中には「～は正しかったか」「～はよかったか」という設定が多い。価値判断という名称に現れているように、この種のディベートは根本に価値基準を置く。だが、価値基準は個々人違う。そのような曖昧なものを基準とすることはできない。また、無理にすれば、価値の押しつけになる。国語教育関係のテーマでは、作品を題材にして

「A（登場人物）の選択は正しかったか（共感できるか）」などが見られるが、果たしてこのようなテーマを扱うのに、仰々しくディベート討論会する必要があるのだろうか。

次に、事実に関する論題について述べる。この論題は推定論題とも呼ばれ、どちらが事実であったかを推定するディベートである。これも私は勧めなかった。それは、論題の設定が間違っていなければ、どちらかが事実である。ディベートの結果とは別に、厳然として事実が存在するのである。このようなディベートに勝ち負けを判断する意味があるのであろうか。また、ディベーターが専門家でない限り、双方とも、限られた２次資料を集めるしかない。そして、集めた資料について違う解釈をする余地は残されているが、意志決定するという余地はない。私は、ディベートとは意志決定の手段として行われるべきものだと考える。

以上の理由から、私は価値判断と事実に関する論題は、ディベートの本質から外れるものだと考える。総じて言うと、特に大学生の年齢に達した学生にディベートさせるのには、お遊びにならない、現実に選択を迫られる論題を選ぶべきだと考える。そして、そのためには、政策論題が一番よいと考える。

（２）評価の基準

フジテレビのディベート番組や産経「ザ・ディベート・アカデミー」の審査では、評価のポイントとしてユーモアを含めた表現力、パーフォーマンスが重視されていた。私は、このようなものを評価基準としていっさい取り入れなかった。何よりも、全体を通しての説得力に判断基準を置いた。それは、先に書いたように、本質を捉えるための手段としてディベートを採用しているからである。ただ、これは言うは易く、行うは難い。

私が実際にディベートをしてみて感じたのは、まず時間の制限がプレッシャーになるということである。授業で行ったフォーマット（約３０分）は私が経験したもの（約１５分）よりも時間的余裕があったが、それでも時間が決められていることは学生にとって相当気になったようだ。

そして、時間の使い方を含め、うまくしゃべっている方が優位に立ちやすい。ここで優位というのは、雰囲気のことである。場の雰囲気、勢いである。やっている本人も雰囲気、勢いに乗ったり、圧倒されたりするが、聴衆も影響される。そして、その雰囲気、勢いで判定を下してしまいがちである。これは、何もディベートに限ったことではなく、社会全般に広く見られることである。和を重んじる日本社会では、あるいはこのような雰囲気、空気、勢いを敏感に感じとることが、円滑に社会生活を送る上で重要かもしれない。だが、私は学生にはそのようなものに惑わされない人間になってほしい一学問的態度とはそのようなものである一と思っているので、このようなもので判断することは諌めた。だが、達成はできなかったと思う。学生の判定は、些末な点で減点したり、個々人の印象、テーマについての自分の意見に左右されるものが多かった。

また、ユーモアや表現力を高く評価すれば、ある学生はそれに走るであろうし、多くの学生は白けてしまうであろう。そのようなやり方で、教室で全員にディベートをさせるのは難しいであろう。

Ⅲ、肯定側と否定側に分かれ勝負することについて

ディベートは、肯定否定に分かれて議論する。そして、勝ち負けを下す。そもそもこのような状況設定に問題はないのか。

Ｓ・Ｉ・ハヤカワ『思考と行動における言語』（岩波書店）は、イエスかノーかという二値的思考を諌め、多値的に考えることを提唱する。同書では、次のように言う。高校や大学の討論でよく見受けられるディベートは、肯定も否定も、自分達の正当さを主張し相手の主張を卑小化するに止まるので論争の知的収穫はごく僅かしかない。多くの時間をそのような論争に浪費するより、その時間を情報や意見の交換に使った方が利益がある。そして、両極端の中間の立場に立つ、実行可能な結論を導く練習をすべきだ、と。以上が、同書の主張である。

確かに、イエスかノーかという枠組みに縛られてしまうのは問題であろう。例えば、「米を輸入自由化すべきかどうか」という問題設定をすれば、米の問題をこの枠組みで考えてしまう。米については、吉本隆明『超資本主義』（徳間書店）はこのような枠組みで考えるべきではないと言う。また、「北方領土は日本の領土か、ロシアの領土か」という問題設定をすれば、両国の対立を固定することになりかねない。日米安保、在日米軍の問題にしても、実際に解決可能な施策は、おそらく全面的肯定と全面的否定との間にあるであろう。誤った思考を固定しかねないという点でも、問題設定には注意を要する。そして、いくら慎重に問題設定しようと二値的設定から免れられないということはディベートの問題点として銘記すべきであろう。

ただ、ディベートでも、プラン（否定側はカウンタープラン）を提出させると、ハヤカワの言う「両極端

の中間の立場に立つ、実行可能な結論」を考える練習になると考える。

だが、一方、現実社会では、二値的決断を迫られることも多い。例えば、この方法、進路を選ぶべきか、わが社はどこどこに工場を進出するかどうか、などである。また、建て前にせよ、立場を表明することが求められることもある。例えば、ペルー日本大使館人質事件で日本人記者が大使館内に忍び込むという事件があったが、記者が所属する会社にせよ、日本政府にせよ、立場の表明が求められる。このような立場表明は、国際社会では特に重要である。肯定否定の両面を考えるディベート的思考は、このような場合の意志決定の手段として役立つであろう。

ディベートの立場は自分の信念とは関係なく決定される。当初これに抵抗を示す学生もいたが、ディベート後は、有意義であったと答える学生が多かった。それは、違う立場の人のことを思いやり、物事を多角的に考える機会になるからである。また、ディベートはもとよりゲームなので、立場、勝敗ともにそれほどこだわる必要はない。この立場で話してみるとどうなるか試みるのがディベートである。

次に、勝敗について述べる。ディベートの勝敗は集団間の勝敗であり、個人間の競争ほど勝敗に拘泥しなくてもすむと考える。（波多野、稲垣『無気力の心理学』中公新書、１２２頁参照。）この場合、上述したように、個人の優劣によってではなく、あくまで全体としての一貫性に評価の基準を置くべきであろう。

総じて言うと、ディベートはあくまでテーマについての理解を深めるために行うことを自覚すべきである。ディベートに問題が生じるとすれば、これ以外のことが目的になった場合であろう。多値的思考をする際の一つの材料としてディベートを認識すべきだ。そして、ディベートはゲームであるから、それが可能だと考える。

おわりに

本稿で述べたことをまとめると次のようになる。

ディベートは、必然性を持ちながら総合的な国語能力を高める手段になる。また、パターンが決まっており、方法論（物の考え方）を身につける練習にもよい。肯定否定の対立という図式については、それに思考が縛られると問題である。だが、逆に思考を高めるための手段として考えればよい。ディベートはあくまでゲームであり、少なくとも授業でやる分には、勝敗の結果が現実の施策に反映されることはない。だから、思考を固定する危険性は低いと考える。

以上は、現時点での私の考えに過ぎない。私自身ディベートについての知識、経験とも不足しており、理解が不十分な点や誤解もあると思う。また、考えた通りに実践できていたとも思わない。経験ある方のご教示を乞う。

参考図書

役に立つと思われるものに限り、以下に紹介する。

北岡俊明『ディベート能力の時代』
（産能大学出版部、１９９０、￥１５００）
…私がまず最初にディベートを知った本であり、ディベートに興味を持つきっかけになった本。少し過激な発言も見られるが、ディベートの方法及び注意点についてわかりやすく書かれている。当時は他の本を知らなかったので、これを教科書として採用した。

北岡俊明『ディベート入門』
（日本経済新聞社、１９９５、￥７５０）
…内容は、前書とそれほど違わない。教科書はこれでもよかったか。

松本道弘『やさしいディベート入門』
（中経出版、１９９０、￥１３００）
…筆者によれば、旧著『ディベート入門』の改訂版であり、入門者にもわかるディベートの技術に焦点を当てていると言う。私が見るところ、かなり細かい指示まで書かれており、書名より高度な内容となっている。授業で述べたい内容を網羅している点、充実度から言って教科書として使うには本書が最適であると思う。

北岡、松本両氏に共通する特徴は、今の日本に危機を感じ、愛国心（日本を外国に負けない国にしたいという思い）からディベートを提唱するという点であり、以下の著書ではそれが全面に出ている。

北岡氏の『韓国とディベートする』（総合法令）を見ると、もともと外国（あるいは広く相手）に負けないためにディベートを提唱しているのではと思える。それに対し、松本氏は、西洋的なものを追求していたが、年齢が高くなると日本的なものに回帰してきたと見受けられる。（松本道弘『ディベートには守・破・離がある』経済界）いずれにせよ、日本を意識しているという点では両者共通である。

松本茂『頭を鍛えるディベート入門』
（講談社、１９９６、￥７４０）
北野宏明『ディベート術入門』
（ごま書房、１９９５、￥８００）
…両書ともなかなか参考になることが書かれているが、具体的な作業手順がまとめられておらず、教科書とするには不適切。参考書として推薦したい。

松本茂『英語ディベート実践マニュアル』
（バベル・プレス、１９８７、￥２２７０）
…即興ディベートと正式ディベートとに分けて、具体的やり方が説明されている。論題も豊富に紹介されており、英語ディベートに限らず、日本語のディベートにも有用。

佐藤喜久雄他『教室ディベート入門』
（創拓社、１９９４、￥２２００）
…学校で行うディベートについて具体的方法が紹介されており、授業を考える上で非常に参考になる。

吉田和志『ディベートをどう指導するか』
（明治図書、１９９５、￥２２７０）
…「教室ディベートの新時代」という全９冊のシリーズの中の一冊。『教室ディベート入門』同様、高校でディベートをどう指導するかについて具体的・総合的に書かれており、実用的である。以上の２冊があれば授業をする上で問題はないと思われる。巻末に参考文献が挙げられているのも便利。

東海大学留学生教育センター『日本語　口頭発表と討論の技術』（東海大学出版会、１９９５、￥２５７５）
…ディベートのやり方が手短かに説明されている。

「特集ディベート」（『日本語学』１９９５年６月号）
…実践上での具体的な注意点が書かれており、参考になった。

ディベート関係の出版物は１９９０年以降増えており、最近のディベートの注目度がうかがえる。ただ、逆に言えば、最近になるまではほとんど文献がなく、本屋や図書館で探す場合も苦労する。本屋では、ビジネスマン用の本は「ビジネス」「自己啓発」のコーナーに、学校ディベートについては「教育」のコーナーに配列されていることが多い。

なお、ディベートの手順を簡単に紹介したものが、
「論理で説得ーディベートを楽しもう」
（『現代語』、明治書院、１９９４）
という教科書にある。１年生で試験的にディベートする際に、これをガイドとして使った。